黙示録の記録

第２２章

永遠のいのち

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

第２２章　永遠のいのち

聖書の最後の章で、ヨハネは聖なる都の記述を続け、いわば、われわれを来るべき永遠の時代に導きます。ヨハネが招きと警告と祈りからなる最後のあとがきを書き終えた時、聖書は完結します。この最高の黙示は創造主が人に対し書かれたことばで終ります。私たちが知らなければならないすべては啓示され記録されています。そして、今、私たちはその成就をただ待つばかりなのです。

私たちは最後に、永遠の死（ロマ６章２３節）を受けるしかない罪人でしたが、永遠のいのちという主の「言い尽くせない賜物」（Ⅱコリント９章１５節）が与えられる理由を、多少ではあるが理解し始めているのです。「いのちのことば」（ピリピ２章１６節）を聴き信じて、「いのちのパン」（ヨハネ６章３５節）の饗宴に預かっており「いのちの水」（黙示録２１章６節）を十分に飲んでいます。そしてこのことは、私たちの名が小羊の「いのちの書」（黙示録３章５節）に消すことができないように刻みこまれたことを保証しているのです。私たちはもはや暗闇を歩くのでなく「いのちの光」（ヨハネ８章１２節）を持っています。そして、私たちはまもなく「いのちの冠」（黙示録

２章１０節）を受け、「いのちの木」（黙示録２２章１４節）にいつでも近づける権利を持っていることを知っています。

もはや呪いはない

天地の創造に着手する前に、全知全能の創造主は、心のうちにご自身の創造に関する偉大でかつ聖なる永遠に変わることのない明確な目的を持っておられました。罪と死の一時的侵入によっても決してその目的が妨げられたり止めさせられたりすることはありません。創造主の慎重な計画で、遂に創造の目的を更新し、完成する時が来たのです。大いなる呪いは被造物から取り去られており、創造主の御國が来ています。

黙示録２２章１節　御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、創造主と小羊との御座から出て、

こうして、ヨハネは遥か遠くから、聖なる都の城壁の内側にある金で出来た街路を垣間見て、聖なる都の外面の美しさだけを記してきました。今、私たちが都の内側に足を踏み入れると、そこには、私たちを楽しませるために準備されている素晴らしさを見抜くための第一歩を学ぶのです。

すべての中で特に目立つのは都の中央でその頂点から流れ下るきれいな光り輝く水を満たした巨大な川で

す。そうはっきりと断定されてはいませんが、この川は（エデンの川が型として流れていたように）四つに分かれ（創世記2章10節）都の住民のためにすべての必要を満たす十分豊富な水を、階から階へと各階の（生理的ばかりでなく審美的）必要を満たすように流れ下っていると推察されます。このことはおそらく正しいでしょう。

恐らくこの四つに枝分かれした流れは、地面の高さに達し、ついで都の四つの城壁から東西南北に流れ出し、そこから主の目のようにあまねく全地を行き巡ります（II歴代史16章9節）。「海はない」（黙示録21章1節）のですから、この巨大な川の無尽蔵の水は新しい地球が必要とするどのような水の需要をも満たします。

原初の「非常に良く」創造された世界のように、確かに青草、薬用植物と樹がどこにでもありあまるほど豊かにあり（創世記1章11～31節）、全地は豊富な資源と創造主の僕たちが職務を遂行するに適した水の豊かなパラダイス（楽園）となるでしょう。

前述の都の城壁にある碧玉とそれらから放射する光に用いられた「水晶のように輝いている」（黙示録21章11節）と同じ慣用句が水を描写するのに用いられていることは注目すべきです。同様に、「天にある御座の前のガラスの海は水晶のようであった」（黙示録4章6節）。全体を通して、これら天にある実体が神聖な彼らの創造主の性質と栄光を顕すかのように混じりけが全くなく、きれいで、光り輝いていることを強調しているのです。

しかし、すべてのうち最も重要なのはこの巨大ないのちの川とそのいける水の源です。現在の水の循環のように、太陽によって水を蒸発させる海はなく（黙示録21章1節）、したがって、川の流れに水を供給する雨もありません。むしろ、聖なる都の中央の頂点にある高いところ「創造主と小羊の御座」から始まっています。

明らかに、力ある創造主が絶えず水を創造し、それから、永遠の命を与えるために絶えず水を送り出し、都とその住民を清め美しくし、それからさらに新しい地の最も遠いところにまで注ぎ込みます。それはいのちの水で、もはや死はありません。

際限なく大いなる淵から出て来るこの不思議な噴水は、もう一つの頂点・カルバリ山の十字架にて、最初に開かれた水の型でした。「しかし、ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。」（ヨハネ19章34節）。医学者は、何世紀にも亘って、救い主のわき腹から血と共に流れ出したこの水の源と性質について考えてきました。それは本質的にまたとない独特で唯一の現象であったと思われます。しかし、たとえその細部にわたる生理学的説明が何であろうとも、主がニコデモに（ヨハネ3章5節）、井戸の傍らで女に（ヨハネ4章10～14節）、そして仮庵の祭りで大群衆に（ヨハネ7章37～39節）約束された大いなるいのちの水をあらかじめ示した型であることを確かに物語っているのです。小羊の血は世の罪を取り除くために注ぎ出されなくてはなりません（ヨハネ1章29節）。しかし、同時に清めと新たな活力を与える泉が開かれなくてはなりません。すなわち、水によって示された聖霊（ヨハネ7章39節）は小羊に贖われたすべての人の中に永久に住み導き活力を与えることが出来るのです。

「このイエス・キリストは、水と血とによって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血とによって来られたのです。そして、あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです。・・（地球上の住民に）あかしをするものが三つあります。御霊と水と血とです。この三つが一つとなるのです」（I ヨハネ5章6、8節）。

十字架で小羊の脇から流れ出た水のように、純粋な混じりけのないいのちの水の川が御座にいます小羊から流れ出て、誰でもいのちの水を永遠に自由に飲むことができるのです（黙示録22章17節）。今でさえ、パプ

テスマの水は、水に入る人々にとって、救い主の贖いの死と栄光ある復活に与かり（ロマ6章3～11節）、清める血（Ⅰペテロ3章21節、Ⅰヨハネ1章7節）と一つの聖霊（Ⅰコリント12章13節）に与かることを象徴しているのです。

黙示録22章2節　都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。

いのちの水をもつ川だけでなく、いのちの実を持つ木もそこにあります。これは明らかに創造主がエデンの園に植えられたのと同じ木で（創世記2章9節）、その実は、アダムが罪を犯した後、人が用いられないように取り上げなくてはならなかった（創世記3章22～25節）ほど顕著な、いのち維持の特性を持っていたのです。しかしながら、その実は、罪深い男女からは差し止められたといっても、「勝利を得る者」（黙示録2章7節）は、新しい地球で、今や自由に利用できるのです。彼らは、最初の復活に与かるすべての人で、それゆえ第二の死である裁きに遭わない（黙示録20章6、14、15節）人々です。

驚くべきことに、その木は一年を通して毎月一つずつ十二種類の異なる実を結びます。この木がエデンの園にあった最初のいのちの木に当てはまるかどうか聖書は何も語っていませんが、推測するに、少なくとも最初の園と最後の園にあった木々は同じであるらしい。いずれにしても、この木は愛である創造主の最も素晴らしい創作品です。この木は永遠に続く多様性をもたらすことのできる遺伝的指示がみごとにプログラムされていました。しかも、その各々の変種はその成分が何であろうと、創造主がその実に授けたいのちを維持する成分を伝えるのです。実際に、用語「種」は原文にはなく、その節はただ「十二の実」と読めるだけ

です。したがって、「十二種類の実のなる収穫物」と理解する事が出来ますが、より自然な意味は「十二種類の果実」と理解してよいように思われます。

聖書の地は果樹に富み、聖書はしばしばそれらの果樹に言及しています。しかし、聖書で実際に名の付けられている果物の種類を書き留めてみるとそれらが如何に少ないかむしろ驚かされます。グレープ、イチジク、リンゴ（ヘブル語のリンゴは実際はアンズを指す可能性があるとある人は考えている）、ザクロ、メロンとオリーブ（もしオリーブを果物と考えるなら）、そして以上でほぼすべてです。いつ実がなるとは述べられていませんが、シュロの木ではしばしば実のなる時期について述べられていて、これらはほぼ確実にナツメヤシでした。いずれにしても、いのちの木は聖書に名の認められる多くのいろいろな果物の約二倍の実を結びます。そして、すべては健康によく間違いなくおいしいのです。

また、実際の時の周期が永遠に続くという暗黙の教えを心に留めて下さい。新しいエルサレムで何月かを同定できることから、創造主がはじめに確立されたように軌道をまわる地球の回転運動は続き、月も同じように地球の周りの軌道を回り続けることを指し示しています。

さらに、もう一つ、いのちの木の葉が諸国の民を癒すために役立つという、大きな価値を持っていることが付け加えられています。翻訳者によっては、このギリシャ語（therapeia）は、新しい地球にいる不死の人々を肉体的にも霊的にも実際に癒す必要があるとは思われないので、「健康」と訳すのがより適切だと考えています。とはいえそのことばはもともとの用法で「治療」または「奉仕」を意味し、そして、ルカ12章42節、とマタイ24章45節で僕の職に関係して「家令、僕」と訳しています。この場合、この文は「木の葉は諸国民の奉仕のため」と読むことができます。木の豊かな葉の化学成分は、その時代の諸国民の経済と工業に

数え切れないほどの色々な用途に役立つのかもしれません。あるいは、木の葉によって健康が保たれるというのが諸国民に対する創造主の御計画（経済効果）でもあるのです。

さらに、いのちの木は珍しいものではなく、多くの実を結び、全世界いたるところに大量に成育します。新しいエルサレムで、いのちの木は金の街路すべての中心にある遊歩道に沿ってまた滝のように流れ落ちる川の両側にある土手に沿って生えています。おそらく、都の外で、この素晴らしい川が全世界に枝分かれし流れ広がるにつれてその支流すべての河川に沿っていのちの木は育っています。

いのちの木！ 有史以来、非常に良く健康に良いことを象徴するためにこの木が用いられるのは不思議ではありません。これは特に箴言に見られます。「知恵は、これを捕える者にはいのちの木である、これをしっかり捕える人はさいわいである。」（箴言3章18節）。「正しい者の結ぶ実はいのちの木である。知恵のある者は人の心をとらえる。」（箴言11章30節）。「期待が長びくと心は病む。望みがかなうことは、いのちの木である。」（箴言13章12節）。「穏やかな舌はいのちの木。」（箴言15章4節）。

知恵、正義、幸福、助けになること、希望、健康――いのちの木によって思い出されたすべて！ このような木とその実と葉が聖書に記されているように実際にあり得るのか、またすべてを成し得るのかを、今私たちが理解するのは不可能です。しかし、創造主の約束は真実です。

最後に、いのちの木からいのちを与える実と川からのいのちの水に絶えず預かる必要性は、新しい地球の人々にとって彼らの創造主であり救い主であるご自身が、いのちと息とすべてのものの根源であることを絶えず証するのです。そして、この知識とこの必要とするものは決して人の重荷になることなく、常に喜びと歓喜に人を留まらせるのです。

黙示録22章3節　もはや、のろわれるものは何もない。創造主と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは創造主に仕え、

前に明らかにされており、まさに物の道理として明らかなことが、（あたかもこのように素晴らしい真理が入れられているはずはなく、驚いたことに繰り返し突然現れなくてはならないかのように、）ここで再び繰り返されているのです。長年の呪いは過ぎ去りました。もはや死もなくもはや罪もないのです。地球とその住民たち、事実上すべての被造物は、これからは永遠に最も力を発揮する状態で繁栄するのです。年をとる人はもはやいないし、失われるものはもはや何もない、すべての働きは生産的で持続します。エントロピーの法則、すなわち、熱力学の第二法則は廃止されます。情報は二度と混乱することはない。秩序ある系が無秩序になることはないし、もはやエネルギーが単に摩擦熱として費やされたり再利用できない熱エネルギーとして失われることはない。これから後エントロピーはエネルギーと質量と運動と共に保存されます。「時間」は永遠に続きますが、「時間の矢」はもはや下向きになることはありません。

「創造主と小羊の御座」が、既に壮大ないのちの川の源として述べられています（1節）。そして、この時、呪いが排除されたとしてもう一度記されています。特に、創造主の全能と贖いの恵みの両方の御思いが、そのまま顕される時、被造物が「滅びの束縛」（ロマ8章21節）の下にどうしてあり続ける事が出来るのでしょうか。また驚くべき啓示「その僕たちは創造主に仕え」が、この節の最後の宣言です。創造主なる王への奉仕より素晴らしい名誉ある特典はなく、この奉仕そのもので、われわれは、創造主に属する王たちであり祭司たち

なのです。こうして、創造主のために統治し、創造主がお創りになったものを通して、創造主に関わる知識を伝えるのです。

この新地における生活は、単なる休息と歌の人生ではなく、むしろ生産性と教育の人生です。確かに、交わりと証のため、また、歌を歌ったり竪琴を奏でたりする機会を持つための時間はたくさんあります。一人一人の贖われた信徒は他の信者に会い、学び、知るための十分な時間があります。ノアが箱船での経験をことばで表現するのを聴き、バプテスマのヨハネに殉教の証を聞きその情熱と幻を共有するのはなんと言うスリルでしょう。われわれはみな一人一人自分の語るべきストーリー、敗北と勝利、すべての弱さと失敗にもかかわらず小羊によって贖われ、最終的に信仰によって打ち勝った物語を持っています。

しかし、また、なすべき仕事があります。永遠がわたし達の前にあり、無限の空間がわれわれを取り巻いています。非常に多様性に富む無限の宇宙の秘密を探検し発見するための永遠の時間を持っています。恐らくわれわれ一人一人は創造主の栄光のために探検し開発するために一つの小宇宙すべてを割り当てられることでしょう。それから、各々は発見したこと、達成したことを共有し、みなで共に喜びます。

または、多分、各自はこの世で主に委任された特殊な才能を発展させもっと十分に用いるでしょう。そうして、前には決して得られなかったこれらの特殊な技術を学び、また彼が望むように発展させる機会を持つのです。明らかに、私たちが将来主のためにする奉仕の特質は、現時点では、単に敬虔な驚きと憶測の対象に過ぎませんが、それがなんであれ、喜ばしい満足のいく奉仕となり得るでしょう。

もちろん、宇宙旅行は、今の世界ではどのような程度でも不可能に思われますが、その日にはありふれたものとなるでしょう。最も近い星は地球から四光年です。自然界宇宙の諸法則の下で活躍している宇宙船

に乗って地球から星へ旅行出来たらという考えは、単なる妄想です。多くの宇宙ではなく、一つの宇宙である既知の宇宙の力学系をもってすると、この考えは常に単なる科学小説です。四つの基本的力は重力、電磁力、核力と「弱い」原子核内の力です。すべての物質は重力と電磁力という力の場で働かなくてはなりません。これらの力は、たとえば一つ天体から光の速度で近づきつつある遠く離れた天体へ相当の大きさの物体を動かすのを不可能にします。考えうる最も進歩した工業技術の下に設計された宇宙船が、地球から最も近い星に旅するのにさえ、確かに何世代もかかるのです。

しかし、この制約は霊のからだには当てはめられません。霊のからだは重力や電磁力に制約されないで、天使の場合のように「速やかに飛ぶ」（ダニエル9章21節）ことができます。われわれの霊のからだはどうやら天使の霊のからだ（マタイ22章30節）に似ており、キリストの復活のからだ（ピリピ3章21節）の速さにさえ似ています。したがって、彼らに似て私たちはもちろん瞬間的にではなく、非常に速く宇宙を横切って動くことができます。こうして、栄光の主に対する私たちの将来の奉仕は広大な宇宙のどこかに割り当てられた仕事を含むこともありえるのです。

しかし、ホームは常にキリストが居られる新しいエルサレムにあります。そこはまたキリストが私たちのために準備した（ヨハネ14章2節）マンションがあるところで、そこは私たちが常に帰るところです。

黙示録22章4節　創造主の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には、創造主の名がついている。

私たちが仕える方は小羊（イエス・キリスト）で、その奉仕に関する報告をするのも小羊（イエス・キリスト）

に対してです。小羊は宇宙の王ですが、小羊は常にご自分の僕に面接します。なぜなら、小羊は彼らを愛し、彼らの贖い主となるために死なれたからです。小羊は決してみ顔を彼らから隠しませんし、僕たちも小羊のみ前に行くのを恐れません。世の罪を取り除く創造主の小羊として、小羊は彼らの罪を取り去られたので、各々の魂と救い主との間を隔てる罪は何もないのです。再三、彼らは「感謝しつつ、その門に入り、ほめたたえつつ、その大庭に入る」（詩篇100章4節）ことになるでしょう。

そうして、彼らが「喜びをもって主に仕える」（100章2節）ため出て行く時、彼らは主の名で出て行きます。彼等の額にある主の名が、彼らが主の僕であることをはっきりと認める印となるのです。これは主に聖なる者の印章と言う形をとるのかもしれません。大患難時代の144000人の証人（黙示録7章3節）の場合のように、また、荒野の日々を通して大祭司の資格として出エジプト記28章38節に「アロンの額に」記された大祭司の冠と金の板と同じように、王冠から下がっている金の板に彫り込まれているのかも知れません。それは、単に主のご性質と現れの告知に過ぎないのかもしれません。なぜなら、彼らは「御子のかたちに創られ」「御子に似るものと」（ロマ8章29節、Ⅰヨハネ3章2節）されていたからです。この身分証明書がどんなに精密な形をとっているとしても、最終的に「キリストの心」（Ⅰコリント2章16節）を完全に共有するという素晴らしい特権に預かる保証であり、わたし達の額にある小羊の御名が、永遠にこの事実の証拠なのです！「彼の上に私の新しい名を書きとめよう」と、主は世に打ち勝ち主の名を否まなかった人々に約束していました（黙示録3章8節、10節、12節）。このように、主の名は我々の名となり、我々はキリストと共に全被造物を相続するのです。

黙示録　22章5節　もはや夜がない。創造主である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。

ヨハネは、新しいエルサレムにおける生活の特性に関するさらなる説明をここに記しています。この同じ事実・都から絶えることなく放たれる光は主ご自身から直接発していると、すでに21章23節と25節に記されていました。しかしながら、それを見た観察点は都の外であり、ここでの観察点は都の内側です。

都の中にいる人々は絶えることのない日の光を楽しみます。決して雲も嵐もなく、少しも暗いところがないのです。私たちの新しいからだは、恐らく、睡眠を必要としないでしょう。それでも、休息と余暇活動のためには十分な時間と機会があるのです。事実、かの日における真の生活の特徴は「休み」と呼ばれています。「こういうわけで、安息日の休みが、創造主の民のためにまだ残されているのである。なぜなら、創造主の安息にはいった者は、創造主がみわざをやめて休まれたように、自分もわざを休んだからである」（ヘブル4章9、10節）。まったく正反対の状態にあるのは、火の池にいる人々で、彼らは「昼も夜も休みが得られない。」（黙示録14章11節）のです。

住居の内側にさえ、十分な光があります。内側を照らすため灯火をともす必要もありませんし、住居の外を照らすのにさえ太陽も月もいりません。創造主のご臨在に伴う栄光が新しい世界の光であり、その他の光を永久に必要としないのです。

住まいは、ヨハネ14章2節で、「マンション（大邸宅）」と呼ばれています。マンションということばは新約聖書で他の時に一度だけ用いられたことばで、同じヨハネ14章23節で、イエス・キリストが言われた言葉です。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその

人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」こうして、新しいエルサレムでは、主イエス・キリストが各々の信徒のために準備して下さったそのマンション（ギリシャ語ではmono）に、父なる創造主と御子なる創造主が住まわれるのです。父なる創造主と小羊が栄光のみ座に着座しておられるだけでなく、また、ある意味で、彼等の僕の家にも住まわれるのです。

恐らく、聖徒はみな男も女も一人一人自分のマンションを与えられることでしょう。もちろん、この人生で一緒に生活した同じ家族が一緒に住むことはできないはずです。私たちすべては、各々の両親の家族に属します。しかし、それから、わたしたちは自分自身の家庭をつくり、子供を持ちます。ある意味で、都にいる人はみな誰でもアダムの家族に属することを認めるでしょう。アダム自身、全人類の家長としてそこに住むでしょう。母なるエバも「すべての生けるものの母」（創世記3章2節）としてそこに住んでいるでしょう。そして、実際に大きな一つの家族に再結合されるのです。

確かではありませんが、夫たちと妻たちが、主が準備された同じ住まいに一緒に住み続ける場合があるかも知れません。7回結婚した夫人についてサドカイ人が本心を偽ってした質問に答えて、主は「復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです」（マタイ22章30節）と言われました。

将来の生活で永続できるはずのない色々な結婚関係がこの世の生活に多くあります。一回以上結婚している人も多くいますし、全く結婚しなかった人達も多くいます。結婚した人の一人は信者で、その相手は救われていない滅ぶべき人と言う場合も多くあります。過去のいろいろな時代には、創造主を敬うある婦人は一夫多妻の家族の一員でさえあり得たのです。また、クリスチャンの男子と女子が結婚式を挙げないで一緒に住んでいた例が少なくともいくつかはあったことでしょう。

創造主が定められた組み合わせは常に一人の夫と一人の妻の不変の結合という取り合わせでした（マタイ19章4-6節）。ところが何世紀にもわたってこのルール（規則）に色々な例外がしかも実に多く見られたので、すべての場合に、地上であったのと同じ結婚関係を永遠にかつ普遍的に続けることはあり得ないのです。

一方、地上で主の命令に従って結婚し生活し続けた夫婦の場合、少なくとも、主は彼らに同じ結婚関係で、永遠に、同じマンションで一緒に生活し続けることを許されるように思われます。そして、このような関係は彼等の来るべき使命に対する創造主の目的と一致しているはずなので、彼らはある資格をもって主に仕えることでしょう。主は、結婚制度を祝福し（創世記1章29節）、イエスは最初の奇跡を結婚の場で行い（ヨハネ2章1、2、11節）、その上、ご自身の民と御自身との結びつきの描写として、主は人の結婚関係を選ばれてさえいるのです（黙示録21章9節）。こうして、このような制度が永遠に継続することは、救われたこれらすべての人々のためだけでなく、この同じ証を持ち続けることの出来た家庭の人々にとっても、この方法で主に奉仕することは効果的で、キリストを大いに尊ぶことになるでしょう。しかし、明らかに、聖書はこの問題に直接何一つ答えていないのです。したがって、独断的主張は不可能です。

すぐに来る

とにかく、この人生で霊的に実り豊かであったすべての人間関係は、来る世ではさらに祝福されたものに

なるのは確かです。夫たちと妻たち、両親と子供たち、親戚と姻戚、友達と同僚・・・みなこの世で今まで想像した以上に愛し、よりよく理解しあうでしょう。主である創造主は、物質的必要を満たすだけでなく、個々の霊的必要にも十分にかなう、またすべての関係を清めるのに十分な個人的導きと洞察を、人生のあらゆる分野すべてにわたって与えてくれます。

私たちは創造主の僕（奴隷）ですが、王とされるのです。その真の特権を思うだけで素晴らしさを十分に知る事が出来ます。わたし達各々に自治領が割り当てられます。わたし達は贖われたすべての人の善と小羊の栄光のためにその自治領を従わせ、発展させ、用い永遠に治めることになるのです。

黙示録22章6節　御使いはまた私に、「これらのことばは、信ずべきものであり、真実なのです。」と言った。預言者たちのたましいの創造者である主は、その御使いを遣わし、すぐに起こるべき事を、そのしもべたちに示そうとされたのである。

この時点で、語っている方は、最後の七つの災害を携えて来た天使たちの一人で、その天使は聖なる都のすばらしさをすでにヨハネに示していました（黙示録21章9、15節、22章1節）。その光景があまりにも素晴らしく約束が非常に驚嘆するようなものなので、このすべてが実際に紛れもない事実であることをもう一度保証するために、彼はことばをさしはさまなければと感じたのです。ヨハネはただ夢を見ているわけではなかったし、これらすべてが単に意味の判らない比喩でもなかったのです。これらのことばは真実で、これらの出来事は、確かにやって来ます。まさに、ヨハネが見、聴きしていた通りにです。その名が「忠実また真実」（黙

示録19章11）である方が「信ずべきものであり、真実である」（黙示録21章5）との言葉を語り、その天使が信ずべき言葉を伝えているのを見るのです。

ある翻訳者は「聖なる預言者の主なる創造主」をある写本の記述に従って、「主、預言者たちのたましいの創造主」と訳しています。しかし、①欽定英訳聖書とそれを支持する原文の証拠はもっと適切で、おそらく正しいのです。旧訳の預言者たちは、しばしば「聖なる預言者たち」（ルカ1章70節、使徒3章21節、Ⅱペテロ3章2節、黙示録18章20節）と呼ばれています。ところが、ただ一つだけ「預言者たちの霊」（Ⅰコリント14章32節）と（そうして、この出典はこのくだりに無関係）とあります。さらに、聖なる名「主なる創造主」は、丁度前の節でも用いられていて「主なる創造主は彼らに光を与えられる」として、同じ方が「聖なる預言者たちの主なる創造主」として適切に記されているのです。古代の預言者たちを召し祝福され、彼らを通して旧約の大いなる預言的メッセージを書かれた方は同じ主なる創造主です。その方は、御使いを通して、新約聖書の大いなる預言を伝えているのです。

この節の最後の宣言「すぐに起こるべきことを、そのしもべたちに示そうとされたのである。」は、ギリシャ語では黙示録1章1節の「すぐに起こるはずのことをそのしもべたちに示すために」とまったく同じです。両方とも「すぐにも」という副詞はギリシャ語で en tachos「急いで」という二つのことばからなっています。おそらく、黙示録で概説した一連の出来事が、もう一度、短期間のうちに完結されることを強調して話されています。（言うなれば、1007年、患難期と千年期）という短期間の出来事です。しかし、恐らく永遠に比して人のこの世の人生が短いことに対する言及です。黙示録に預言された出来事は、最初に、宛名の書かれた七つの教会が存在しているうちにたちまち成就されるように始まった。七つの教会時代に、患難時代と

千年期が続き、私たちには長い時間のように思われるかもしれませんが、永遠から振り返ってその期間をみる時、実際には「すぐに起こるべき事」即ち「短い時間に終わってしまった」と思われることでしょう。

黙示録22章7節　見よ、わたしは、すぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は、さいわいである。

黙示録の最後の部分は、黙示録の序文の約束を幾分か繰り返しています。黙示録1章1節の最初の句で、来るべき事どもに関する主イエス・キリストの啓示が天使を通して、しもべヨハネに送っているかのように思われます。この宣言は、実際に繰り返し述べられています（V6）。その成就は黙示録1章3節に「時が近づいている」とあらかじめ示されていました。ここで、主イエス・キリストは、いわば、「すぐに来る」と約束した天使の差し迫ったメッセージを強調するかの様に語っています。そして、「すぐに」来ると約束しているのです。「すぐに」ということばは、前の節で用いられたギリシャ語の名詞の副詞的な用い方で、「すぐに」と訳されたが、実際には「急いで」を意味します。

それから、黙示録1章3節の驚くべき約束は「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである」とあります。黙示録を読み聞くだけで祝福があるのです。そして、これが黙示録にある七つの「至福の幸福」の第六番目です。今や黙示録の内容を読み聞くことはほとんど完決し、強調点が特にそのことばを守るという欠くことができない重要な課題に移っているのです。主はヨハネに彼が見たことすべてを書き記すように命じ、こうして、ヨハネの「書」はほぼ完了しました。

読む者または聞く者はこのようにヨハネの「書」の預言(すなわち、予報または予告)を持ち続ける(すなわち、

守るまたはしっかり掴む）ように迫られているのです。聖霊に導かれて書かれた聖書すべてのうち、たとえであっても、いくつかをさらにこのように理解することが必要です。この書の数え切れない読者や翻訳者が、黙示録を比喩的に解釈したり、精神的に解釈したり、拒否したり、または嘲笑したりしています。しかし、それを読み、それを信じ、その「ことば」をしっかり保つ者に対して、すなわち、この最後の書にある創造主から実際に与えられた聖なる祝福のことば「幸いである」は、主イエス・キリスト御自身によって約束されたことばなのです。

黙示録22章8節　これらの事を聞き、また見たのは私ヨハネである。私が聞き、また見たとき、それらのことを示してくれた御使いの足もとに、ひれ伏して拝もうとした。

ヨハネは聖書を読む人たちのために、自分自身の証を付け加えています。アジアの七つの教会にいた初期の読者たちは個人的にヨハネを知っていて、彼を愛し敬っていました。ヨハネは自分が報告している恐るべき出来事は実際に見たり聞いたりしたまぎれもない事実（黙示録1章9節、21章2節を注意）であることを読む人々にもう一度保証しています。

それから、また、突然の素晴らしい光景にヨハネは圧倒されました。そして天使の前に身を投げ出し、また、衝動的に天使の足もとに平伏しました。以前にもヨハネは（黙示録19章10節）これと同じ過ちを犯しており、その結果、これらのことを示してくれた天使から戒められたことがありましたが、またもや自分を抑えることが出来ないほど反射的に、ヨハネは創造主の御心に感謝の意をこめ、服従の意を表わさずにはいられ

ませんでした。これは前に記しましたが、真の礼拝の真髄です。ヨハネにとって、天使の前に平伏すことが手っ取り早い方法でした。ヨハネの行いは、創造主に対する敬意と服従の現われからでした。このことをしようとしたのは確かです。本文は彼が天使を拝んだとは言っておらず、御使いの足下にひれ伏して主を拝もうとしたと述べているのです。それにも拘らず、この行為は不適切で正されなくてはなりませんでした。

黙示録22章9節　すると、彼は私に言った。「やめなさい、わたしは、あなたや、あなたに兄弟である予言者たちや、この書のことばを堅く守る人々と同じしもべです。創造主を拝みなさい。」

ヨハネは天使を拝むべきでないことを既に良く知っていたとはいえ（コロサイ2章18節を注意し、黙示録19章10節を比較せよ）、天使の足もとにひれ伏すことは創造主に対する礼拝の表れであり、実際に、この場合それ以外の何ものをも意図していなかったのは確かです。それにも拘らず、天使はそのことで彼を咎めなくてはならなかった。創造主以外の何物かまたは何者かを拝んでいるように見られることは絶対に避けなくてはならなかったのです。モーセの十戒の最初の二つで、どのような被造物（天にあるものでも地にあるもの）でも決して拝んではならないと強調されています。さらに、人であろうと天使であろうと被造物が他の者によって礼拝されるのを許してはいけない。例えば、ヘロデ王はこのようなへつらいを受け入れた結果、主の使いに打たれて死んだ（使徒章12章21～23節）し、ネブカデネザルは理性を取り去られ野に追放された（ダニエル4章28～37）。天使のうち最も高位にあったルシファー（サタンと同じ）は、創造主のように礼拝されたいと強く願ったので、天からよみに落とされ（イザヤ14章12～15節）、最終的には火と硫黄の池になげこまれます。ヨハネ

に啓示を伝えた天使は、すべてを知っていたため、ヨハネに自分を礼拝するように思われる行為を許さなかったのです。この天使は、黙示録19章10節で、他の天使がヨハネを叱責したように、ヨハネと天使は同じしもべであり、霊的兄弟であることをヨハネに思い起こさせました。さらに、ヨハネが今主から命じられていることを正しく行うよう、即ち、聖書のことばを守るように伝えました。

このことは、創造主を礼拝するためになんらかの助けとなるものを持たねばならないと感じている人々への鋭い戒めもあるのです。即ち、像のようなもの、厳粛な雰囲気、音楽に合わせて手をたたく、数珠やお守り（護符）を持っての祈祷、特別な建物や祈祷室などを必要と感じている人々への痛烈な非難もあるのです。もし、力ある天使でさえ礼拝を適切に導いたり、神聖な雰囲気を提供しないなら、人の手になるものが提供できないのは当たり前です。「創造主は霊ですから、創造主を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」（ヨハネ4章24節）。最も偉大な預言者でさえただ恵によって救われた罪人に過ぎないし、最も傑出した天使でさえ仕える霊に過ぎない（ヘブル1章14節）のです。真の礼拝は創造主のみ心と目的を顕すために尊び従うだけであることを思い起こさなくてはなりません。

黙示録22章10節　また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけない。時が近づいているからである。

私たちはこの書の預言のことばを堅く守るだけでなく、それらを永久に誰にも必要ないと言わんばかりに、

封印されるべきではありません。むしろ、それらは封印を解かれ、明瞭に詳しく説明され、その上で人々に告げ知らされなくてはなりません。これらのことばは判りやすく読み解かれ、その上で人々に告げ知らされなくてはなりません。これらのことばは教会に向けてであり、その必要性は差し迫っているみことばです。それは預言に示された完全なる成就の時が最終局面を迎えているためです。

「この書の・・・ことば」と言う句は、ここ4つの節（7～9節を見よ）に3回も強調されています。同じことば（ギリシャ語でロゴス）がこの章の終わりに、「この書の・・・ことば」（18、19節）と訳されてさらに二回出てきます。創造主は、預言のことばが堅く守られ信じられ述べ伝えられるために、単なる思想や解釈でなく、生きた言葉を必要としておられるのです。

ある意味で、この命令自体が預言になっています。なぜなら、黙示録から書かれた多くの解説書と説かれた説教は、おそらく、かつて書かれたほかのどの書にも引けをとらないくらい多いことでしょう。しかし、多くの解説書は黙示録の封印を解くのにほとんど役立っていません。なぜなら、こんなにさまざまな解釈があり、非現実的に精神的に解釈されている本は他にないのは確かだからです。

わたしたちはこの書のことばを堅く守るべきです。創造主はわたし達に天使やヨハネを通して平易なことばで語ることが出来るのは確かです。創造主が言われることを創造主に語らせるのがより良いのです。この書は啓示の書で、神秘的な書ではありません。黙示の書で正典と認められない外典ではありません。贖いの書の封印が最終的に完全に解かれた（黙示録5章5節）ように、特にその日が近づくにつれて、啓示と目的達成の書は決して封印されたままであってはいけません。

黙示録22章11節　不正を行うものはますます不正を行い、汚れた者はますます汚れを行いなさい。正しいものはいよいよ正しいことを行い、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」

主ご自身がこの驚くべき認可（命令）を語っておられるのは明らかです。9節では天使が語り手でしたが、12節から16節までは明らかにキリストが語っておられます。その変わり目は9節と10節の間で、明らかに天使がヨハネに創造主だけを拝しなさいと熱心に説いた時です。「また、彼は私に言った。・・・」で始まった10節は、今語っておられるのは礼拝の対象である創造主ご自身であることを明瞭にわたし達に告げていることばです。

このようなわけで、この節の厳粛な宣言は特に重大であり、必要不可欠なのです。それは文脈上、「時は差し迫っている」と「見よ、わたしはすぐに来る」（10、12節）と言う緊急の出来事と差し迫った事柄の二つの主張の間に挟まれていることからもわかります。すなわち、主の来られることの確かさとその時が何時なのかの不確かさから見て、すべての人は、どこにいようと、啓示されている通りに来る裁きに照らして生き方の価値を見極めなければなりません。同様に、約束されたすべての祝福に照らして、行動すべきなのです。

キリストの福音がある人をひきつけ勝ち取る一方、同時に、同じ福音が他のものをはねつけ頑なにするのは人の性格の驚くようなパラドックスです。「ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです」（Ⅱコリント2章16節）。「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、創造主の力です」（Ⅰコリント1章18節）。多くの群衆が大患難の裁きを通して救われる（黙示録7章9、14節）でしょうが、すべてに抵抗すると心に決め、

ますます頑固になる人さえ更に出てくるでしょう（黙示録6章15～17節、9章20、21節、16章9節）。

同様に、今日、黙示録の講解と朗読は多くの人に並々ならぬ大きい祝福をもたらしますが、他の人々には嘲笑と怒りだけを引き出して、嫌悪の思いを抱かせます。終わりの時に、「多くの者は、身を清め、白くし、こうして練られる。悪者どもは悪を行い、ひとりも悟る者がいない。しかし、思慮深い人々は悟る」（ダニエル12章10節）のです。

こうして、畏敬の念を起こさせる原理が、ここに宣言されたのです。福音の究極的目的達成をも含めた福音の完全な意味を知れば知るほど、福音によって分けられる結果がますます明らかになります。それにもかかわらず、福音はなお宣言されなくてはなりません。実際、主は言われます。「どんなことがあっても、この預言のことばを守り宣言しなさい。邪悪なものはそれを聞いて彼らの邪悪さがなおさら確かなものとされるでしょう。それはそれでよい、また、創造主を敬う人々がいます。彼らは大いに祝福され創造主を敬う精神的傾向がますますはっきりと定着するのです。」

副詞「still なお」は、「more ますます」の意味で理解されなくてはなりません。正しくないものすなわち、不正なる者は「ますます不正に」なるのに任せなさい。対比して、「正しい者にはますます正しくならせなさい」。このようなことは実際、一方で恐怖を他方で歓喜をもたらす書、未来を紐解くこの驚くべき書の研究でしばしば見られる結果です。

主が語っておられる「汚れ」た者とは、洗われていないだけではありません。むしろ道徳的に汚れており、堕落したものです。「聖なる」者とは、心と生活面で聖別された人々で、聖霊によって創造主の御意志に自分を献げた者です。

人の性格がこのように固まり、永遠に進展し続いてゆくのは明らかです。火の池で、邪悪な堕落した人は、その邪悪さと堕落さとが永遠に続き、それに伴って、彼等を腐敗させるうじは決して死なず、彼らの悩める心は決して安らぐことはないのです。このように恐ろしい環境はそれ自体「…不義の世界で、…ゲヘナの火で焼かれます」（ヤコブ3章6節）。

しかし、驚くべき対比があります。キリストにある信仰を通して、真の義と聖を与えられたすべての人は、彼らが創造された「真の義と聖とを備えた創造主にかたどって作られた新しい人」（エペソ4章24節）へと永遠に成長するという祝された展望を持つのです。

黙示録22章12節　見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれの仕業に応じて報いるために、私の報いを携えてくる。

主は、6回も「私はすぐに来る」とこの書・黙示録で約束しています。二回は警告（黙示録2章5、16節）であり、四回（黙示録3章11節、22章7、12、20節）は約束です。二回、主が「盗人のように来る」（黙示録3章3；16章15）ことを示し、ここでも、最初は脅迫として、次いで約束として示しています。「すぐに起こるはずの事」（黙示録1章1節、22章6節）をヨハネに示されたと主は二回述べています。

このように、黙示録全体を通して、実に差し迫った感が、すなわち、主の来臨に対する期待の空気と共に、キリストのすぐなる再臨を待ち望む状況があります。来臨の正確な日時の指定はどこにもありません。信者はどの瞬間にもキリストの来臨という祝された希望に照らして人生を整え、常にその時を待つべきです。黙

示録に順序だてて述べられている、ともかく4章で突然始まって、完全に連続して起こる一連の出来事は突然起こり、それから壮麗な成就へと素早く展開します。

さらに、主が来られる時、忠実な僕に与える報酬、すなわちそれぞれの働きに応じて割り当てられる報酬を携えて来られるのです。もちろん、これは聖書の多くの箇所に記されている約束です。すなわち、救いはその働きとは別ですが、報酬はその業に応じて与えられるます。邪悪な者は彼らの仕業に応じてさばきの宣告がなされるが（黙示録20章13節）、正しい者は、各自が肉体にあってなした行為に応じて報いを受けるのです。この報酬は、キリストの裁きの座で授与されます（Ⅱコリント5章10節）。それは行いの量によるのではなく、働きの「種類」または「質」に基づくのです（Ⅰコリント3章13-15節）。そして、このすべてはキリストが帰ってこられ、御座を地球の上に置かれる時に行われます（黙示録4章2節）。

黙示録22章13節　わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」

四度にわたって（黙示録1章8、11節、21章6節、22章13節）主イエスはご自身を「アルファでありオメガである」と言う注目すべき名で呼んでおられます。黙示録の初めの方で二回、終わり近くで二回、主は私たちにキリストが始めであり終わりの方であることを思い出させています。永遠から永遠まで彼はいと高き方です（詩篇90篇2節）。キリストは創造者であり、完成者です。御子イエスは「万物より先に存在し」（コロサイ1章17節）、「万物の相続者」（ヘブル1章2節）であり、最初であり最後の方です。キリストはご自身を三回「アルファであ

りオメガである」と呼び（黙示録1章8節、21章6節、22章13節）、四回「最初であり、最後である」（黙示録1章11節、17；2章8節、22章13節）と呼んでおられます。

事実、使徒ヨハネは彼の五つの新約聖書の書簡で、創造を引き合いに出しながら、キリストと関連して「初め」に言及しています。少なくとも12回、特にヨハネ1章1節に「初めにことばがあった」と言及しています。

主イエスは、創造者であると共に啓示者でもあります。主による創造の事実こそ主が啓示される方であるとの事実に到らせるのです。なぜなら、主は目的なしに創造することはなさらないし、創造主がご自身のかたちに創造された人に目的を示さないでおくはずもないからです。生けることばは書かれたことばによって啓示されるのです。聖霊によって動かされた人が人のことばで書いた文書を通してです。創世記で、御子はアルファであり、黙示録で、御子はオメガです。この二つの書の間に、64冊の素晴らしい書があり、これらすべては、人を創造された方の輝かしい計画と目的を人に伝えているのです。御子を創造主として知ることが土台です。御子を贖い主として・友人として・主として知ることが救いです。そして、御子を来るべき王として知ることが動機づけなのです。

黙示録22章14節　自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。

いのちの木にあずかる特権を与えられ、又門を通って都に入るために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである。（1955年改訳）

これは黙示録にあるすばらしい「祝福のことば」の七番目で最後のことばです（黙示録1章3節、14章13節、16章15節、19章9節、20章6節、22章7節を参照）。主は全人類の二つの区分をもう一度強調しています。これらは救われた者と失われた者であり、聖なる都に入れる人々と入れない人々です。義なる者はいつまでも義であり、不義なる者は常に不義なのです（V11節）。聖書が、ほぼ完成している今、主は、聖書の記述が誤りないことを最期に確認する前に、最後の差し迫った警告と、もう一度丁重な招きと約束を伝えなくてはなりませんでした。

祝福に関する主の最後の約束は「戒めを守る」人々に対するもので、都に入り、いのちの木にいたる権利を彼らに請合うものです。もちろん、「その衣を小羊の血で洗って、白くした人々（黙示録7章14節）」という患難期の聖徒に対しより以前になされた言及があります。また、聖書は救いは創造主の恵みによるのであって、戒めを守ることによるのではないと明瞭に教えています。

しかし、黙示録には創造主の戒めを守ることに関しさらに二つの言及があります。「女の子孫の残りの者、すなわち、創造主の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たち」（黙示録12章17節）と「創造主の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける聖徒たちの忍耐はここにある」（黙示録14章12節）の二つです。

さらにヨハネの書に少なくとも「戒めを守る」ことに関する言及が10回あります（ヨハネの福音書14章15節、21節、15章10（2節）、Iヨハネ2章3、4節、3章22、24節、5章2、3節）。人は戒めを守るだけでは救われないとはいえ、救われた人々は、確かに、創造主の戒めを愛し心から戒めを守ろうとします。このことは確かに正しいのです。主イエスは言われました。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです」（ヨハネ14章15節）。「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛に留まるのです」

（ヨハネ15章10節）。ヨハネが書いたものの中にこれらの力強いことばが出てきます「もし、私たちが創造主の命令を守るなら、それによって、私たちは創造主を知っていることがわかります。創造主を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。」（Iヨハネ2章3、4節）。このほかに本質的に同じことを語っている箇所がたくさんあります。

このように、問題になっている他の幾つかの事例のように、内的証拠の比重は、断然、欽定訳に有利な事が判ります。それはいのちの木への権利を持ち御子の命令を守る人々だけです。彼らは命令に従うのではなくて、キリストにある彼らを救う信仰が、御子の命令を守るように彼らを促し守らせているからなのです。彼らの信仰は、外見上に見ることの出来るものではなく、キリストの命令に対する彼らの愛は彼らの内的信仰が本物であることを証明しているのです。

もちろん第一で最も大切な戒めは、創造主に対する愛で（マタイ22章37節）あり、「また、わたしたちは愛しています。創造主がまず私たちを愛してくださったからです」（Iヨハネ4章19節）。「創造主の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」（Iヨハネ3章23節）。聖なる都に出入りし、素晴らしいいのちの木にあずかる人々は、確かに主イエス・キリストを愛する人々で、それゆえ、イエス・キリストの戒めと完全な御心を愛します。

黙示録22章15節　犬ども、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行なう者はみな、外に出される。

主を愛し主の命令を守る人は都に入ることが出来ます。なぜなら彼らの名は小羊のいのちの書にあり、彼らは主の血によって贖われているからです。しかし、新しい地の喜びを決して楽しむことのできないさらに多くの人々がおり（マタイ7章13節、14節）、彼らの名はいのちの書（黙示録21章27節）にはなく、彼らは永遠に火の池に閉じ込められるのです（黙示録20章15節）。

ここに再び、永遠に地獄で苦しまなくてはならない罪人の特筆すべき顕著な幾つかの部門をあげています（黙示録21章8、27節）。ここに挙げられた最初のグループは犬どもと言う不快な呼び名で書かれていて、特に不快なグループの人たちを軽蔑した明らかなことばです。同じ人々を暗に指し示すことばがピリピ書3章2節に「どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼のものに気をつけてください」と描写されています。この用語は、おそらく、その性格が固まっていていずれにせよ犬のような行動を取る多くの種類の人々に当てることが出来ます。イザヤもイスラエルにいる不忠実な教師について「彼らはみな、おしの犬で、ほえることもできない。夢を見て、横になり、眠りをむさぼっている。」ついで「この貪欲な犬どもは、足ることを知らない」と述べています（イザヤ56章10、11節）。

さらに道徳的に芳しくない人物の描写が「イスラエルの女子は神殿娼婦になってはならない。イスラエルの男子は神殿男娼になってはならない。どんな誓願のためでも、遊女のもうけや犬のかせぎをあなたの創造主、主の家に持って行ってはならない。これはどちらも、あなたの創造主、主の忌み嫌われるものである。」と申命記23章17、18節に記されています。ここで「犬」と言う用語は、明らかに「ソドム人すなわち男色者・獣姦者」と同義語として用いられており、事実、古代イスラエルにおいては、異教の不道徳な寺院での礼拝で男娼の為の婉曲なことばとして用いられていました。実際に、イスラエル人たちは、このようなことを実

際に行っていたこととの関連で、異邦人をグループとしてしばしば侮辱して「犬ども」と呼びました。おそらく、主の家に売春婦や男娼を連れ込むことに対する禁止は、明らかに真の主の宮を異教の宮に変える事に対する警告で、これが新しいエルサレムから「犬ども」や男娼を遮断するための答えなのです。

同性愛の罪だけでなくどのような種類の売春も「主に対し忌むべき者」とされ、「憎むべきことを行う者」は都に入れません（黙示録21章27節）。この節で、これらの「犬ども」は、「魔術を行なう者」のグループで、彼らは、前に検討したように、異教の宗教儀式と薬物使用に、また「不品行の者」や「偶像を拝む者」とに関連しています。これらすべては、聖書時代の異教の宗教儀式と結びついていて、それに関連して、異教の人々は性的に邪悪なことを実際に行なっていたのです。

しかし、今の時代、同じようにこれらすべての罪に人々がどんなに汚染されているかにも注意してください。近頃のキリスト教国では、概して、性に対する寛容性だけではなく、同性愛の驚くほどの復活を考えてください。これらの罪は一般に今日薬物や神秘的自然崇拝や多神教的信仰と偶像崇拝の貪欲と見え透いた偶像崇拝とさえ結びついており、紛れもなく偶像礼拝であることは言うまでもありません。ヨハネが使徒時代の人であったと同じ程度に、終わりの時代の観点からも書いていたことを、すべては示しています。「人殺し」も同様に一覧表にあります。これらの人は魂を滅ぼすだけでなく身体をも滅ぼします。そして、科学技術、知的文明の発達した現代は、歴史上どの時代よりも殺人の比率が最も多いことを経験しています。そうして、このようにひどい罪を犯していない自分は正しいと感じてしまう人が誰一人いないように、もう一度、主は「嘘つき」も一覧表に加えています（黙示録21章8、27節と較べてみよ）。キリストの血によって許され清められなければ、偽りを行なう人々も都といのちの木から除外されるのです。

創造主のことばの終結

聖書の最後の書・黙示録22章の最後の区分で、主イエス・キリストは、救いに対する最後の招きをし、同時に、聖書の一語も変えたり付け加えたりしてはいけないとの最後の警告と、キリストの再臨が差し迫っているとの最後の約束をしています。キリストは教会時代残りを通して、これから起こる大きな出来事すべて、大患難、至福千年期と最後の裁きを私たちに明らかにしています。新しい地球が来ます、そして新しいエルサレムが、私たちは来るべき時代の栄光を垣間見ることができたのです。この壮大な叙事詩すべての中で、最後のことばほどかつてないほど差し迫って重要なものはありません。このことばを持って主は人に対して書かれた啓示を終わらせているのです。

黙示録22章16節「わたし、イエスは御使いを遣わして、諸教会について、これらのことをあなたがたにあかしした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」

黙示録4章1節の初めから教会についての言及はありません。教会時代のすべての教会を代表する七つの教会に宛てた書状と、その中に書かれた出来事の後、地区教会の制度に幕が引かれ、教会は舞台から消え去っ

ています。患難期と千年期を通して黙示録に教会は一つも見出せません。また、新しい地球でさえ教会についての言及はありません。勿論の事、新しいエルサレムの甦った住民はすべて、後で出てくるキリストの花嫁に当たり、彼らが「天に集められた長子たちの教会」なのです。今の時代にあっては、「教会」は世から「呼び出された」集会です。ギリシャ語のエクレシヤ自体は「呼び出された集会」を意味します。一方、新世界では、すべての人は創造主につく人々で、創造主を敬わない人々はすべて「追い出され」ています。

患難期に関する限り、それが終わるまで、自分自身を教会と呼んでいる多くの自由主義的宗教団体がまだあることでしょう。しかし、すべての真の教会は地球大気圏にキリストが来られた時携挙されており、それに従って、これら「自由主義の教会」は教会と認められていないのです。これらは皆、大淫婦バビロンの混合主義で特徴付けられる宗教組織に併合されるでしょう。そうして、全世界が大患難期の中頃に獣礼拝を制定する時、自由主義の教会も教会とは言わなくなります。

いまや、黙示録はほぼ完了しているけれども、主はもう一度やがて来る事柄について現在の教会時代に私達に呼びかけています。黙示録はもともと真の教会にやがて来る事柄について教授することを意図して与えられた事実に、注意を向けるように呼び掛けています。事実、黙示録は教会に対するヨハネの手紙（黙示録1章4節）でしたが、天使（黙示録1章1節）と聖霊（黙示録2章7節）からも各々の教会に伝えられました。なんといっても、この手紙はもともとキリスト御自身からのものだったのです。キリストはご自身の血で各々の教会を買い取られ（使徒20章28節）、ヨハネを通してこれら総てのすばらしい啓示を教会に伝えるために天使を遣わしておられたのです。

ついで、聖書の中でキリストが呼ばれている特色のある名前の最後に、ご自身の決定的な唯一の身元確認

がきます。たとえアジアにある七つの教会を含め、教会はこの時点まで、主として異邦人の信者たちから成っていたとはいえ、主はなお愛情を持って古くからのイスラエルの人々に配慮しておられました。従って、そこで、主は尚ご自身の祖先であり末であるダビデ王の血族であることをもう一度教会に思い起こさせようとされたのです。

キリストは既に「ダビデの根」（黙示録5章5を見て確認）と呼ばれていました。今、キリストはご自身をまたダビデの「子孫」【ギリシャ語genosは本文の内容によっていろいろな意味を伝える言葉で、直接の子供から「民族」または「親戚」というはるかに広い概念を伝える】と呼んでいます。要求している呼び名は、事実上創造主であり人である方ということです。人が同じ人の祖先であり子孫であり得る方法は他にありません。イエス・キリストはダビデの主でありダビデの子（マタイ22章41～46節）なのです。キリストは諸民族の創造者ですが、なお、特に選民と同じ民であり、キリストは全人類の王としてまたイスラエルの王としての両方の王座に永遠に就くのです。

最後の肩書きは「輝く明けの明星」です。この肩書きはキリスト以外にはどこにも用いられていません。したがって、創造主の目的とみ業の最頂点とでも言うべき終結を述べている聖書の実に最後の、このところで用いようとしていることからこの肩書きは特別重要な肩書きに思われます。また、これは「夜明け」という独特なことばがただ一度出てくるところです。ギリシャ語orthrinosは、もともと、夜明けに輝きつつ昇って来る惑星・金星に当てられた用語で、キリストが勝利を得るものに「明けの明星」を約束された時（黙示録2章28節）、キリストは朝を指すギリシャ語（proinos）とはまったく異なった用語を用いました。この点で、勝利を得る者は、特別無比に輝く明の明星であるご自身と同じであると確認しているのです。

創造主に仕える天使たちはしばしば聖書で「星々」と呼ばれており、一度だけ「明けの星々」（ヨブ記38章7節）

と呼ばれていました。けれども、「ルシファー、暁の子」（イザヤ14章12節）と同じと確認された一人の天使がおり、その天使は天において創造主に対する反逆を導いた天使で、紛れもなくあの旧き蛇サタンそのものです。その名「ルシファー」は多くの翻訳で、金星・夜明けに輝く星（ヘブル語heylel、夜明けに輝く星）・「Day - star 明けの明星」と訳されています。

これら二つの言葉は聖書で各々ただ一回用いられています。旧約聖書でheylelはサタンを指し、新約聖書で、orthrinosはキリストを指し示し、両方とも象徴的に昇りつつある輝く夜明けの星と結びついています。主イエスがこのユニークな呼称を用いられたのは、サタンではなくイエスこそ昇りつつある星で、その来臨が永遠の日の夜明けを告知するという事実にあります。主はこの事実に人々の注意を最後に喚起しようとされたのです。したがって、この意図で用いられた肩書きであろうとの結論は避けられないようです。世界のすべての歴史と創造主のすべてのことば（全聖書）は、直接または間接的に、キリストとサタン、女の末と大いなる赤い竜との大闘争に占められています。サタンは、創造主の星々のはるか上に私の王座を上げ、：密雲の頂に上り（イザヤ14章13、14節）天で昇りつつある星であると主張しましたが、今や、彼の星は天から落とされ永遠に火の池に閉じ込められたのです。

一方、主イエス・キリストは真の夜明けの星・「輝く」明けの明星でした。その明かりは決してかすむことなく空から投げ落とされることもないのです。このように、この名称はルシファーに惑わされないでキリストの来臨を夜通し見守っている諸々の教会にいるご自身の民が思い出す祝された肩書きです。ルシファーは創造主の上に上ろうとしましたが、その反逆はすぐに鎮められるはずです。事実、サタンは多くの者「全世界」を惑わします（黙示録12章9節）が、私たちは、サタンの策略を知らないわけではありません（＝コリント2章11節）。

サタンとは何者かまたキリストは如何なる方かについての適切な知識を持って忠実に立ち向かうなら、サタンは逃げ去ります（ヤコブ4章7節）。その用語の完全な意味を知っていようがいまいが、キリストに贖われた人々は、有史以来、救い主の輝かしい御名「輝く明けの明星」を愛し喜んだのです。

黙示録22章17節　御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

主イエスからのこの優しい意気揚々とした宣言に対し、引き続きすぐに、創造主である聖霊と花嫁である聖都からの力ある応答の叫びがきます（黙示録21章2，9，10節）。あたかも荘厳な都自体が全世界に招きを聞くように大声で叫んでいるようです。しかしさらに、この叫びは一人ひとりの信者（身分上、信者の住まいと市民権は、既に新しいエルサレムにある）の中に住まわれる聖霊が信者の心を動かして心からなる聖霊の招きを今の時代に発しているものと予想されるのです。彼らの魂も唇も同様に、熱心に絶えず「来てください」と叫んでいるのです。主の来臨を目撃するのは将来のことですが、この将来の出来事は、現在においてさえその嘆願をし続けているのです。疑いも無く、その願いは第一に主イエスご自身に向かって語られているのです。この章で三回、主は「すぐに来る」（7、12、20節）と約束しています。そして、最後の勧告のことばは明らかに主ご自身に向けられています。「主イエスよ、来てください」（20節）と。何世紀にもわたり、聖霊は、各々の信者の心の中にあって、主の再臨に対する真剣な願いをいつも働かせています。事実、キリスト御自身が私達にキリストの再臨を見つめ待ち望むように勧めています（ルカ21章29～36節）。使徒パウロ

は「主の現われを慕う」べきであることを指し示しています（Ⅱテモテ4章8節）。

来てくださいとのキリストに対する嘆願は、聖霊の祈りとしては明らかに一度だけの記録です。おそらく、使徒がロマ書8章26節で語っているのは、特にこの祈りを指しているのでしょう。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」ところが一方「・・・私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます」（ロマ8章23節）。さらに、「耳のある者は（御霊が諸教会に言われることを）聞きなさい」（黙示録2章7節）。そして、真心を持って心からこの預言のことば（黙示録1章3節）・約束された祝福を聞き、受け入れる時（黙示録1章3節）、聞く者は、また、確かにキリストに来てくださいとの熱心な祈りに加わらなくてはならないのです。

しかし、この招きには他の面があります。聖霊と花嫁と新しく聞く者が、キリストの来臨を熱心に願うだけではなく、彼らは世界のためにキリストの来臨を切望しているのです。したがって、この招きは貨幣の両面のようです。片方には「主イエスよ、来てください」とあり、反対側には「主イエスのもとに来なさい」とあるのです。

二つの招待状は確かにたがいに補いあうものです。終わりの日に、人々は「来臨の約束はどこにあるのか」（Ⅱペテロ3章4節）と言ってあざ笑います。しかし、キリストは忘れておられるのではありません。「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに

進むことを望んでおられるのです（＝ペテロ3章9節）。もし私たちが真に「そのようにして、主の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早め」（＝ペテロ3章12節）ようとするならば、私たちはあらゆる手段を用いて人々をキリストに招き続けるべきです。「私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい（＝ペテロ3章15節）。主が帰ってこられる時、主は「万物をご自身と和解させてくださるのです」（コロサイ1章20節）が、その時まで、主は「和解のことばを私たちにゆだねられたのです」。こういうわけで、「私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。創造主の和解を受け入れなさい」（＝コリント5章19，20節）と。

このように「来なさい」という招きは、聖霊を通して、花嫁を通して、そしてこの優しい声を聞く各々の人を通してキリストを必要としているすべての人に差し伸べられているのです。男の人々も女の人々も渇いた心のために混じりけのない永遠のいのちの水を必要としており、水の供給は飲むために豊富にあります。「川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、創造主の都を喜ばせる。創造主はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。創造主は夜明け前にこれを助けられる。」（詩篇46篇4，5節）。

さらに、招待状は「誰でも欲するものに」与えられます。創造主の選択の不可思議さは、最終的に、創造主ご自身の見方を通してのみ説明され明らかにされるのです。創造主のみが初めから終わりまでをご存知で、それゆえ、「みこころによりご計画のままをみな実現される方」（エペソ1章11節）なのです。私たちの心は、空間と時間によって造りだされたものに過ぎませんが、創造主は御心のままに宇宙と時間を創造されたのです。それゆえ、創造主ご自身の全知に関わる事柄を私たちは、現時点で推し量ることは出来ません。創造主は、ご自身のみこころに私たちの意志を従わせるために、私達にどのような条件を付け、なぜご自身の身心に私たちの心を合わせようとするのかを私たちは知りえません。人の言葉で創造主の特権を説明しようとするの

は厚かましいことです。

しかし、私たちはこのことを知っています、それは主がそのことを語っておられるからです。もし、だれでも、いのちの水を味わいたいとの願いを少しでも持っているなら、主イエスに来ることができます。事実、彼は主の下に来て、十分に飲み、創造主と小羊のみ座から流れ出ている大いなる川に飛び込むように強く勧められているのです。そうするなら、再び決して渇くことはないのです。

黙示録22章18節　この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、創造主はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。（1995年改訳）

預言の書を完結するに当たって、主イエスは、顕わされ書かれた事に関する最も厳しい重大な警告を与えています。主は私達に告げようと意図されたすべてを語りました。したがって、どんな人(男でも女でも)でも、または天使でも創造主からの啓示がさらに追加されると考えてはいけません。私たちには、主からの実際の言葉（ギリシャ語のlogosは7節の「ことば」と訳された語と同じ）があり、創造主はみ言葉を守るすべての人を祝福すると約束しています。正確な見解を伝えるためには正確なことばが必要です。主が私達に考えるように願っていること（見解）は何かを考えてみましょう。もし、私たちが主の言われる言葉を信じるなら、これ以上の言葉は必要でないし、適当ではありません。

それゆえ、主はこの警告を無視する者には非常に厳しい裁きを約束しています。誰かが敢えてある種の新しいと想定された【啓示】を提出し、創造主からの啓示だと主張するなら、その事実こそ、彼が主をまった

く知らないことを証明するのです。それゆえ、「忍耐についてのわたしのことばを守らなかった」ので、主は、「地上に住むものたちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなた方を守ろう」（黙示録3章10節）という約束をこのような人には適用できないのです。たとえその人（男でも女でも）がクリスチャンであると自認していても、教会の携挙の時、主と会うために天に挙げられることはなく、その代わりに、「病の床に投げ入れる。また、・・・大きな患難の中に投げ入れ」（黙示録2章22節）られる人とされるのです。「この書に書いてある災害」は、もちろん、来るべき大患難の時にこの書と世界に特有なものです。したがって、このことは、このような偽りの預言者が携挙されることなく、大患難の苦しみに与かる事を意味しているのです。

この警告は、いわば、「聖書」に何か完全に新しい書を加えることではなく、黙示録に一章あるいは二章を加えることを示唆するだけだと考えている人がいます。しかしながら、このように考えると、すべての問題は取るに足らないものになります。ヨハネが黙示録を書いた時、彼は非常に年を取っていたし、アジアの七つの教会すべてにヨハネ自身がよく知られていました。誰一人敢えてヨハネの黙示録に新しい付録を追加しようとするものはいなかったことは明らかです。このような詐欺師は、ヨハネの黙示録の終わりにある警告がなくても、すぐ「嘘つき、山師」の汚名を着せられたはずです。したがって、主が心配しておられたような可能性はまずありえないはずです。

しかし、偽りの預言者が後で起こり、聖なる霊感によって与えられたと主張して書簡、福音書や外典を教会に持ち込む危険性は、まさに現実の問題でした。このような人々は、エペソ書2章20節の「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」という土台か

ら人々を離れさせるように導き、彼らのことばを新しい聖書として受け入れるように求めるかも知れないのです。ヨハネは使徒たちの最後の人でした。そして、使徒パウロはコリント第一の手紙13章8節と10節で「預言の賜物ならばすたれます（消え去るとおなじことば）。・・・完全なものが現われたら（すなわち、完成したら）、不完全なものはすたれます。」と述べております。今や、やがて来るすべての事柄に関するキリストの啓示すべてが、最後まで生きていたキリストに愛された使徒ヨハネを通して、教会に伝えられて、ついに聖書は完結しました。後に出て来て「これらのものを付け加え」るよう要求する者は、実に冒涜者であり、ずうずうしさの骨頂と言うべきなのです。その人のその行為自体が、彼が偽りの預言者であることを証明しているのです。

これを疑う人がいるなら、その人に言わせなさい。では、どのようにして創造主は、ご自身の啓示が完結したことを私達に告げることができるのでしょうか。その場合、無制限に追加可能になったはずで、諸々の教会は偽りと本物を区別する方法を決して持ち合わせることが出来なくなったはずです。新約聖書にはやがて出てくる偽りの預言者と偽りの教師についての警告がたくさんあります。そして、彼らは創造主のために語っていると考えているが、実は創造主の真の預言者と使徒の証言の土台を削り取っているのです（マタイ24章24節、ガラテヤ1章8、9節、Ⅱコリント11章13～15節、Ⅱペテロ2章1～3節）。その危険性は実際に起こり得る状況で、ヨハネ自身前もって彼の読者にそのような人々のことについて警告しています（Ⅰヨハネ4章1節）。

事実、使徒時代から今に至る全教会史は、このような偽りの預言者と彼らが思い込んだ「啓示」によって悩まされ続けてきたのです。マホメットのようにある人々は全民族を真理から離れさせ、彼らすべてが全体に及ぼした影響は数え切れない程の悲劇を齎しています。それゆえ、創造主が最後の使徒を通して与えた最

後の啓示で、この死を齎す危険に関する厳しい警告と重い刑罰を付加しているのは当然です。

しかしながら、一つの質問が付け加えられるかもしれません。どのようにしてマホメッド、ジョセフ・スミス、メアリー・ベイカー・エデイや他の人々が大患難が始まるずっと前に死んでいるのに大患難の災害を経験するのですか？　最後の世代にキリスト教国を悩ましているおびただしい偽預言者たちが患難に投げ込まれるが、前の世代の偽預言者たちに関してはどうなのか？　この問題は、火の池に入るすべての人が受ける懲罰には色々な種類と程度の差がある事実を認めることでおそらく解決されます。各個人は、今の世で「自分のしたことの報いを受け」（ルカ23章41節）ていないかも知れませんが、永遠に続く懲罰によって、現世でした事の報いを受けるという平当化が彼らをなお待っているのです。

とにかく、主が帰ってこられる時起こる霊感された大いなる未来の出来事の最後の記録・素晴らしい黙示録を完結するにあたり、最後に完結された創造主の書かれた言葉に、何かを付け加えようとする人に対して、主は最も重い刑罰を与えると明確に述べておられられるのです。いま世界を席巻しつつある教えの風やあらゆる種類の宗教が後の世に増え広がること、それらの大部分は実にカリスマ的な人格と彼の聖なる啓蒙と権威の主張に基づいていることを考慮すると、この警告はかってとは比べ物にならないくらい今日ますます必要な警告となっています。

黙示録22章19節　22章19 また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、創造主はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。（1995年改訳）

もし、聖書のことばに付け加えることが死に値する重大な罪であるなら、聖書のことばを削除することはさらにもっと邪悪で危険でさえあるのです。偽りの聖書を真の聖書に加えることは少なくとも救いの福音を保つ真の聖書を無傷で残します。他方、聖書から気に入らない言葉を切り取る（ギリシャ語の「取り除く」とおなじ）試みは救いのメッセージと生ける真理を薄め破壊します。それこそどんなに悪くても偽りの啓示を伴うカルト（邪宗）の影響が、なお自由主義者といわれる人々ほど致命的でない理由です。自由主義者は専ら彼らの人間中心主義的偏見や進化論的仮定事項に反する聖書のすべての部分をカットしたりうまく言い抜けるのを得意としています。聖書のすべてはこのような人々によって攻撃されていますが、創世記や黙示録ほど攻撃されている書はありません。

カルト（邪宗・個人崇拝的な宗教分派）はこの預言の書のことばに付け加えますが、自由主義者はこの預言の書からことばを取り除きます。そして、主は、両者をもっとも厳しい罰を受けるに値する冒涜とみなしています。主イエスは「聖書の言（ことば）は、すたることがあり得ない」（ヨハネ10章35節）と言われました。

モーセは、モーセの五書が聖なる感動を持って書かれた事に関し「わたしがあなたがたに命じる言葉に付け加えてはならない。また、減らしてはならない」（申命記4章2節）と同じような警告を発していました。

すなわち、後の「編集者」または「校訂者」は、どうであろうと創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記のことばを変えたり整理し直したりしようと考えるべきでないというのです。モーセとモーセの律法に対し古代イスラエルが抱いてきた実に深い尊敬と、ユダヤの学者がモーセの五書の原稿を書き写すに当たっての細心な（小心翼翼たる）注意を考慮して、私たちは、モーセ自身の時からこれらの書物がわれわれに少しの誤りも無く伝えられてきたと信頼して間違いないのです。もしそうでなかったら、モーセの書について

彼が編集した写本にどのような編集者が申命記4章2節を入れたままにしておいたでしょうか。考えられないことです。それにもかかわらず、現代の「高等批評家たち」は傲慢にもモーセがしてはならないと命じたことをまさにこれらの書にしているのです。そうして、高等批評家たちは、ただ彼ら自身の進化論的空想に合うように、現在の聖書の形体は多くのモーセ以降の著者や編集者によって完成されたと思い込んでいるのです。

モーセの警告は、もちろん、厳密には、モーセの書だけに当てられたものですが、創造主を受け入れる民に他の聖書を伝えるために創造主がモーセ以外の預言者たちを用いることを妨げるものではありません。事実、キリストの来臨を預言して、創造主はモーセを通して「わたしは彼らの同胞のうちから、おまえのようなひとりの預言者を彼らにために起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼は、わたしが命じることを、ことごとく彼らに告げる。彼がわたしの名によって、わたしの言葉を語るのに、もしこれに聞き従わない者があるならば、わたしはそれを罰する」（申命記18章18，19節）と言われました。この預言がキリストにおいて成就したことは宮の門でなされたペテロの大説教（使徒章3章20～26節）によって確かめられました。

主イエスは、ご自身の使徒と預言者を順次呼び出し、彼らに御父が命じられたことば（ヨハネ17章8節）を与えていました。そして、これらのことばは聖霊を通してすべてを思い出させてくださる（ヨハネ14章26節）と約束しておられたので、お返しに、彼らは他の人々のためにこれらのことばを記すことができました。主イエスは、聖霊は「あなた方をすべての真理に導く」そして「やがて起ころうとしていることをあなた方に示す」（ヨハネ16章13節）…「御霊は私のものを受けて、あなたがたに知らせる」（ヨハネ16章14節）と約束されました。

この新約聖書の啓示は、創造主が選ばれた使徒たちや預言者たちを通して与えられる筈でした。「この奥義

は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、それ以前には、人々に同じようには知らされていませんでした」（エペソ3章5節）。

実際に、新約聖書を与えられていたこれらの使徒たちと預言者たちは、聖霊によって建て上げられ存在するに至るはずのいける信者たちからなる大いなる「建物」の土台を構成する（エペソ2章19～22節）と言われています。もちろん、いったん、土台が置かれると、その上に建つ建物は一挙に建てあげられ、長い休止期間が置かれることはありません。使徒職の一つの条件は、復活後の主を見た者（Ⅰコリント9章1節）ということで、使徒たちは、聖霊の導きのもと彼らが書いた新約聖書の中に教会の土台を置きました。ヨハネはこれら弟子たちの最後の者でした。したがって、彼の最後の書は、土台の上に建てあげられた最後の積み木です。これ以上付け加えるのは余計でかき乱すものとなるから、何物もつけ加えるべきではないし、何物も取り除くことは出来ません。なぜなら、取り除くなら建物の土台を侵食し、結局、建物全体を崩壊させるからです。

その書（ギリシャ語 biblos the book から Bible 聖書と言う言葉が出た）から何物かを取り除くことに対する刑罰は、小羊のいのちの書から名を除くことにほかなりません。完成された創造主の完全な啓示に異質の偽りの啓示を付け加える人々は、大患難に投げ込まれるかもしれませんが、彼らが死ぬ前になお悔い改めの可能性があるのです。一方、創造主の真の啓示のどの部分でも、あえて批判し拒否しようとする者は、まさにその態度によって、創造主の啓示されたみこころと和解し得ない相容れない立場であることを証明するのです。彼らは、創造主の言葉（聖書）を読み理解したうえでみことばを拒否したのです。それゆえ、他のすべての人と同じように、妊娠した時にいのちの書に書き込まれた彼らの名は、悲しいことに、彼らが主のことばを拒否した主によっていのちの書（黙示録3章5節）から取り去られ、彼らは永遠に火の池（黙示録20章15節）に引き渡されなければ

なりません。

これが聖書をいじりまわす者誰に対しても最も重大な告発であり、厳粛な警告なのです。なお、それは黙示録だけに当てはめられると言う誰にも反対させないために、歴史上有名な、無神論者やヒューマニストだけでなく、キリスト教国におけるいろいろな近代主義者、自由主義者、高等批評家や偽学舎たちをあげても良いのかも知れません。彼らはダニエル書、イザヤ書、ヨナ書、使徒の働き、ペテロの手紙または聖書のその他どの本をも否定し、疑問をもち、嘲笑し、寓話化し、いつも決まって黙示録や創世記やモーセの五書のほかの書（出エジプト、レビ記、民数記、申命記）に対しても同じことをしてきたのです。いわば、聖書の最初と最後の書が試金石となっていて、したがって、これらの書に対する人の態度が、男であれ、女であれ、常に、聖書全体に対する彼等の真の態度を決めるように思われます。それゆえ、主はモーセの著作についてモーセに完全無欠とのお墨付きを与えており（申命記4章2節）ヨハネには、黙示録の犯すべからざることを強調したのです。

このような人々はいのちの書から自分自身を断ち切るだけでなく、主が彼らに思い出させようとしているように、創造主が彼らに持つことを願っているあらゆる祝福からも自分自身を断ち切るのです。主は「わたしは何人の死をも喜ばない」（エゼキエル18章32節）ので、だれでも望む者のために、ヨハネの書に実に大雑把に報告されたように、筆舌に尽くしがたい喜びと満足の備わった永遠の美しいホームを準備しているのです。しかしながら、主は、「望まない」者に来るように強要することはありません。彼らが、創造主の言葉なるイエス・キリストを拒否し、「在りてある方」としての創造主を拒絶していて、彼ら自身がでっち上げた「他のイエス」を信じると終始告白しているので、もし、彼らが創造主の前で生きつづけるように強要されるなら、

筆舌に尽くせないほど惨めな筈です。それゆえ、悲しいことに、創造主は彼らの名を小羊の書から、すなわち、創造主の御臨在の下にある祝福から切り離し、永遠に火の池に投げ入れなくてはなりません。

ヒューマニストや宗教的自由主義者たちはこの重大な宣言からの警告を受けているだけではありません。自称福音派の信者たちがたくさんいて、彼等は、不信者の批評家と対話することを流行や知的と考え、彼らの好意的感情を引き止めるためにしばしば聖書を曲げることさえするのです。使徒ペテロもまた「無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の個所のばあいもそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています」（Ⅱペテロ3章16節）と述べ、このようなえせ学者の可能性をも警告しているのです。

両立できない不信仰の線が引かれ、その名がいのちの書から消される時をご存知なのは主だけです。しかし、聖書がまさに終わろうとするところにあるこのような警告は、読者各々に自分の心を必ず調べるようにさせるのです。そして「創造主の言葉はみな真実である」（箴言30章5節）との言葉を疑わず歪めることなく信じているかどうかを確認させるのです。

黙示録22章20節　これらのことをあかしする方が仰せになる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アアメン。主イエスよ、きたりませ。

すぐに帰って来ると言う最後の唯一つの約束と、イエス・キリストの偉大なる預言の言葉である証言（黙示録1章2節、19章10節）が終わります。「これらのこと」とは、黙示録の出来事と約束と警告のすべてを指し、さらに、完成された聖書のことばを一語たりとも変えてはいけないとの厳粛な命令でクライマクスに達して

いるのです。たとえキリストが再び帰ってくるとの約束が１９００年前になされたとしても、キリストの来臨は常に差し迫った問題であり、年月が過ぎれば過ぎるほど来臨の時は間近になります。永遠の見地からすれば、キリストの来臨は本当に差迫っています。

たとえ、人間の時間の尺度でずっと遅れているように思われようともです。とにかく、キリストの来臨は確かです。キリストが来られる時、キリストの来臨に伴うと預言された出来事すべては、キリストがこの書で証言されたように速やかにそして確かに成就されます。

この驚くべき約束に対して、ヨハネは心に深く感じて、「それならそれでよい」とだけ答えることができました。彼以前の人も彼以降の人も、来るべき世界の栄光を見た人は誰もないので、ヨハネは、この後、その実現の日が早かれと熱心に求めるだけでした。聖書の最後の祈りは、創造主が約束されたように主が速やかに来ることを熱望してのヨハネの祈りでしたが、それから何世紀にも渡って数え切れないクリスチャンの唇にもこだましてきた祈りでもあるのです。カルバリーの十字架で死ぬ前にさえ「わたしは再び来る」と主は約束されました（ヨハネ14章3節）。そして、キリスト者たちはキリストの帰られる瞬間までこの祈りを叫び続けるのです。

そして、あらゆる世代のクリスチャンたちが、常に、自分の生きているうちにキリストが来られるかもしれないと期待しています。それは全くふさわしい。とはいえ、歴史上かってなかったほど大いなる確信を持って、今の時代の信者たちは、キリストの今すぐの來臨を期待してるのです。かってないほど多くのクリスチャンたちがキリストの再臨を祈っていますし、おそらくこのこと自体キリストがすぐ来られる前兆でもあるのです。

黙示録22章21節　主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように。

終わるに当たって、ヨハネは、七つの教会にいる友達に個人的挨拶と祈りを加えています。彼らは来るはずの驚くような記録をまもなく読み聞くことになるのです。しかし、聖霊はまた、世界中のすべての教会にこの同じメッセージを送っています。そして、キリストは彼らに同じ挨拶と勧告のことばを伝えています。なぜなら、黙示録と書かれた創造主のすべてのことばを閉じるに当たってこれよりふさわしい方法はないからです。

「主イエスの恵み」パウロは彼の書簡（ヘブル書を除く）を同じ挨拶（ロマ書1章7節、Ⅰコリント1章3節、Ⅱコリント1章2節、ガラテヤ1章3節、エペソ1章2節、ピリピ1章2節、コロサイ1章2節、Ⅰテサロニケ1章1節、Ⅱテサロニケ1章2節、Ⅰテモテ1章2節、Ⅱテモテ1章2節、テトス1章4節、ピレモン3節）で始めています。そして、各々の書簡（ヘブル書を含む）を同じ別れの辞（ロマ書16章24節、Ⅰコリント16章23節、Ⅱコリント13章14節、ガラテヤ6章18節、エペソ6章24節、ピリピ4章23節、コロサイ4章18節、Ⅰテサロニケ5章28節、Ⅱテサロニケ3章18節、Ⅰテモテ6章21節、Ⅱテモテ4章22節、テトス3章15節、ピレモン25節、ヘブル13章25節）で閉じています。ペテロは二つの書簡の各々を同じ挨拶（Ⅰペテロ1章2節、Ⅱペテロ1章2節）で始めており、ヨハネも彼の一つの書簡（Ⅱヨハネ3節）でそうしています。もちろん、ヨハネは彼の書簡黙示録を同じ宣言「恵みと平安が、あなたがたにあるように」（黙示録1章5節）で始めています。主イエス・キリストの恵みが聖書の各ページを照らしています。

クリスチャンの生涯は恵みで始まり、恵みによって保たれます。だから常に恵みを表すべきです。しばし

ばするように、失敗する時、なお恵みを通しての許しがあります。なぜなら、キリストは「すべての恵みの創り主」（Ⅰペテロ5章10節）です。そして、創造主の「恵みは十分」（Ⅱコリント12章9節）です。創造主を信じ主のことばに従うすべての者にとって「創造主はあらゆる恵みをあふれるばかりに与えることのできる方です」（Ⅱコリント9章8節）。

そして、来るべき時代に、彼の友への告別の祈りはすべてのあがなわれたものに成就する素晴らしい預言になります。「優れて豊かな恵み」が、「あとに来る世々において」（エペソ2章7節）、イエス・キリストにおいてわたしたちに現れます。そして、「主イエス・キリストの恵みが」実際に、永遠にわれわれと共に、われわれの上に、われわれの中にあるのです。

それに対し、私たちはヨハネと共に深い感謝を持って「アーメン」と答えるだけです。